



5630
1

15
5630
2

能家奇人後書之中

竹憲玄玄一送信男 蓮庵玄玄 卷一

松尾桃青

葉すに俗名甚七宿辰七宿志右の筆此武後阿の
今言聖山頼房隆の三玄性小信く忠なると云は

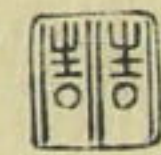
松尾忠左衛門ハ伊賀上陸後密阿某此近臣方より一年在
里テ取口を立いで活不より吟叟ニ遊學するも七年寛
文の末つと東武に下至礫川の水尾修成備夫己方内工功
裁後依の比難藝一と風羅材己いふ源川又唐を結ぶ
三つ多毛蓬を挿く 亦む毛あり世小舉く毛蓬唐己
稱に依松葉堂名唐義堂 初此名を宗府といへり後桃青と
改む又杖錢子芸佛切等唐諸号あり素より學識宏博
桑家飄逸古今小名人素記所取高里且裸言哉仏頂老
少二怪王画法を成河伴六了堀りり尚財その種又依



能家奇人後書之中

一

昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑
 鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
 其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏
 蕉翁真之脫漏而已 儀伴閑人



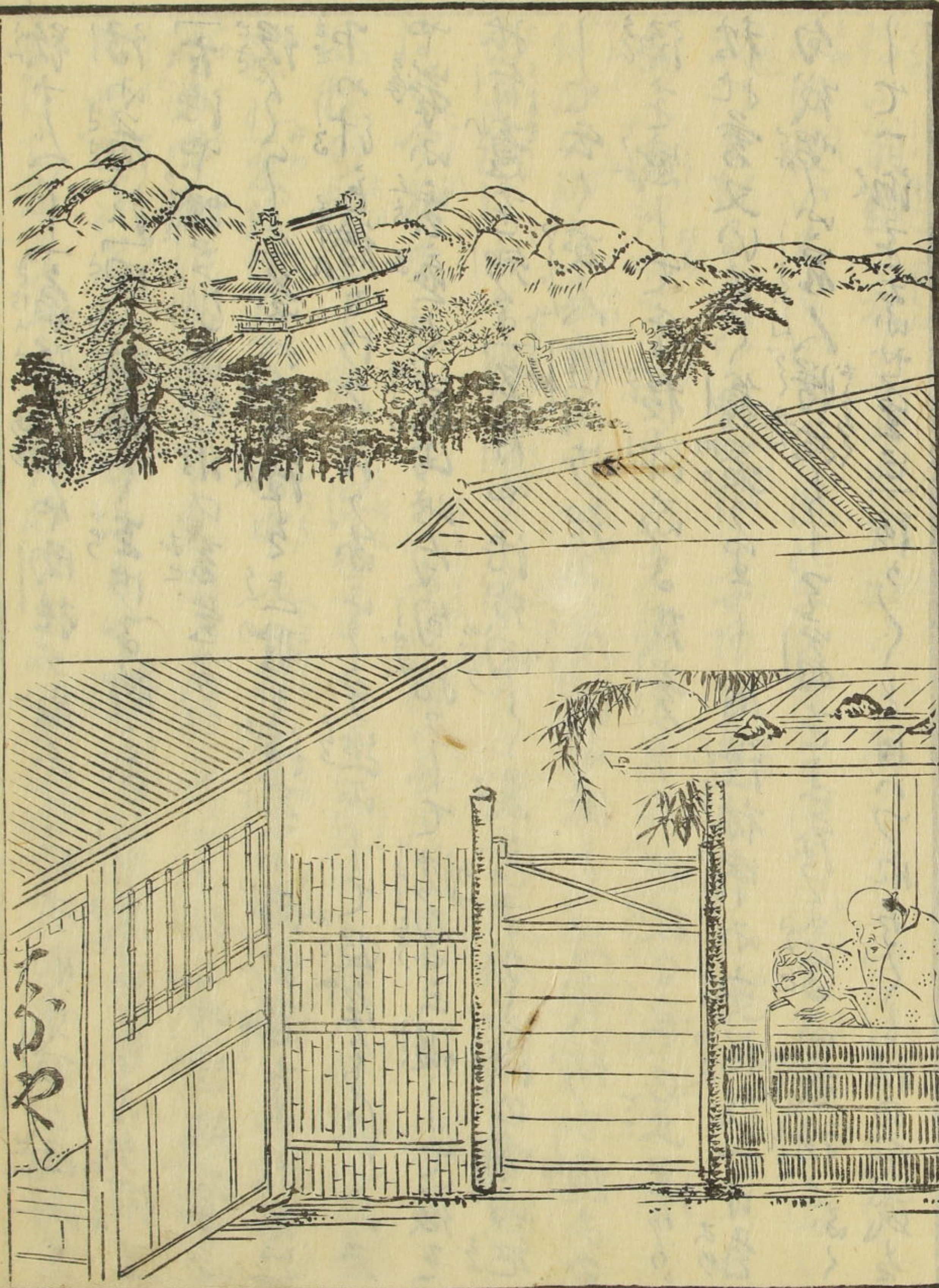
之月

予

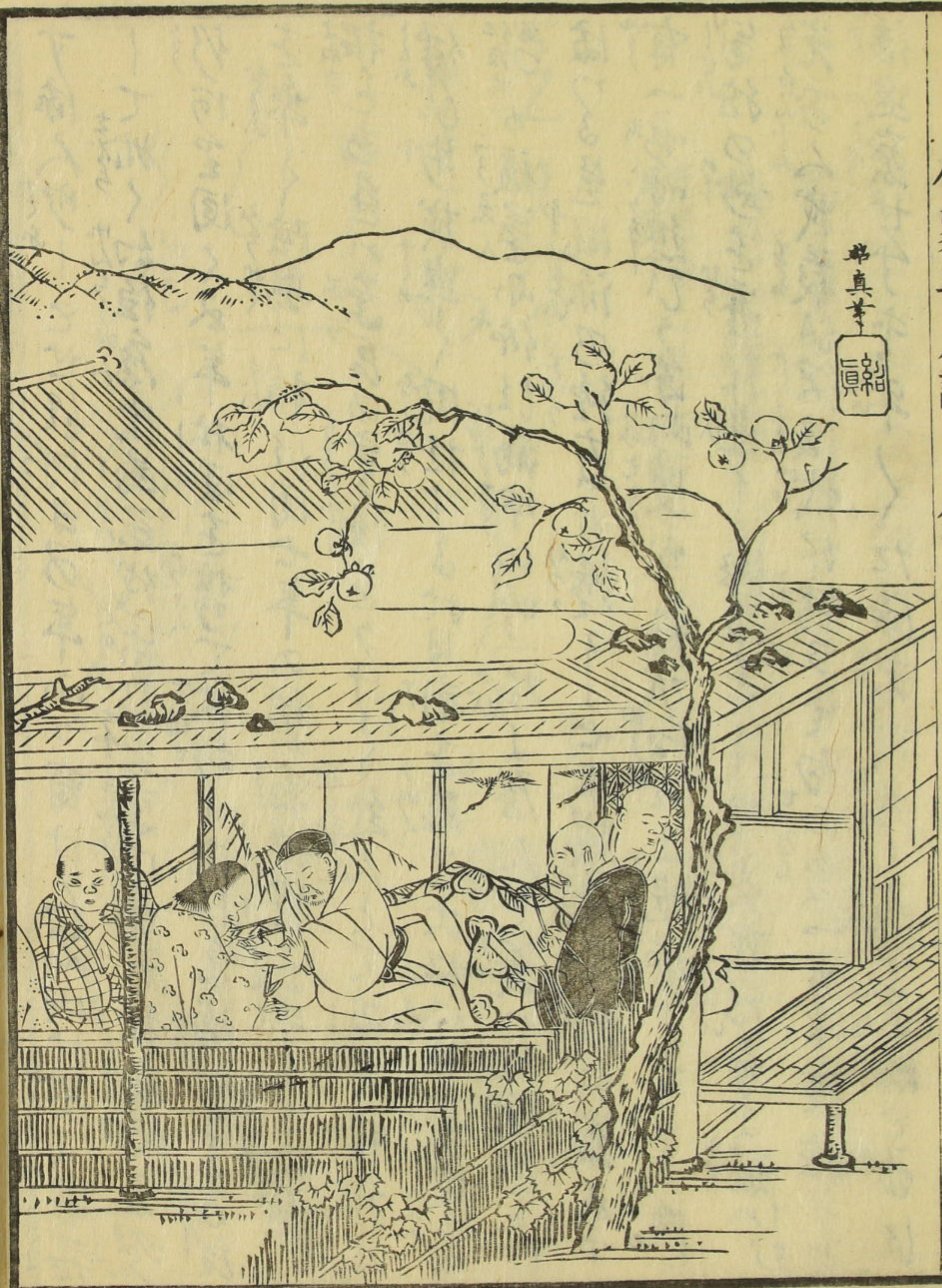
日

池

す家人も一己せ何もの年ふり有けん石山此奥又密居
 して始く幻位爲忠幽深哉亦む久寧口年の秋鹿鳴哀吟
 仍何里回く又年松玉を携て大杉又遊びえ深二年首良
 を舉ぐ陸奥に旅及同七年の秋の御伴賀又在らる浪急
 振毛あまの奈良の重傷をうけく然んとて支考將猶哉
 侍ひ歩哉進く風托する此日病を患え大坂由雲亦る屋
 敷り後至小休に病中の吟「旅」屋んで爰に枯野をうけ
 ほりる是風詠乃強なり後「七」日哉るく双に葉又十
 有一嗚呼悲ひう亦此更をこたび江左又龍舉してあり始て
 旬日の妙を筆記遂に「能」借を「三」葉哉侍奇又藤の
 光あ人哉蔽ひは後代に垂る空句正愛一ちりは狂るを
 後進察せしや平くた家考哉名く以て三昧と爲は



三



眞
眞

二

秋ぞん—「象深の雨や西推がぬふ北をみれ東坡の西海志
 待小庭は「田一板挿くまける柳くみ彩を今此奇あり催す
 「古池や埴こひはむ水の音はすつ—王様は妙境紙筆ふ
 流ぐ—「空は雲鐘と上形う浅菜う幽玄酒ち—「本北
 下汁と給もけ久良くあそむ遊ふ—皮厚くは「六月
 や夢小雲並く嵐山此句句法—「後厚之襪—「後そ
 此旨意を知る「名月や池我同く板とすうう洛の嘯也記
 —「て云く友人雅園は死又度はふ遊ぐ目我知る適よの
 誦を感して生精深ある哉覚うこ「枯枝は鳥の止まらり
 秋北音又いちく翁若う里—「時澄林中小交社は一日是
 句我唱小庭人愕然—「空雁をよ序のまふ哉社もふく
 —「て一池を空せ里と「何うくと目いつれちくも秋の風或も

傳ふ翁感は杜ぐ此句我地より風の字を山に留て北枝—
 示は枝いなくいまど風北字の佳な海小の如す翁驚を曰く
 我たむむる—「此み地よ子あり送り月く興あ—「此
 露小淋和味を忘る—「お名羅申箱加別金城は杉梅高芳哉
 休庵の砌り雲亭小—「一板會合何里—「に空寂意山海の珠
 味を没けたり燈は陰く諸人あ—「後會我約せん—「此海い
 はく今秋高とてあ—「心華北徑の云徑は幽ぐ—「根らくの
 風種は結ふ—「我を涼香をよめる—「空定めず或は時末—「登
 寂此爰我結ひ或は山中—「一村名を凌ぐ独るに形る珠
 揚滋味あに風海の本意あ—「んやと挿—「と空地は木枝香
 柳全寫此名我あせるも空寂海のは冬屋うち係—
 よ月てふり「十六夜わつう小雲は始り空院望の作古今

此篇の有りし出づる者存すといふ「源頼朝の遺書」と書し「魚の胎
 平徳中寓無限悲涼宣を傳ふ晋子と雄高を懸する者や成
 殊る「千重の衣を著く後世人は」漏する「山陰東を何や」
 やり「葉竹」梅が霜よけりといふの出る山陰の家「是れ山より山と
 目法を認めけりけりいふつ海よけりいふぬ人の言さよ「尾形屋の本様
 言ふ小倉水より」多すはく「宵暮ら」一虫北超「今やばりり
 んも年よれ初阿ぬおき生に愛つちり「尾形屋」味いすんが何る
 尾形屋「史風種破路」七「一愛して難強とあり再愛して
 西漢五言とあり三愛して「歌行雜辨とあり「四愛して沈宋
 律詩と成海蓋」一愛成実より改冬寒を忘ふ和げらるるも
 本阿和奇の習りぬといふは「又い」一尾形屋「尾形屋」連奇といふ
 は阿一もて「尾形屋」尾形屋の流といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」

尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」
 尾形屋「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」尾形屋といふは「尾形屋」

大成して天下後世まで傳へし徳勝中興の太祖と稱譽せらるるも
 宣方依りお捧まれば豊足及ぶ海切を依り傳へし徳勝の二彩戎戎王
 水子之河ひ千幸弟若一大家にのくお生戎源度するも
 等とやいなんお小若満すべし 子細あれは様とせし

横本具南

横本の母お空角之竹中東味が子あり赤と源助と名し附の神田
 於玉が池は後より儒戎寛政先生お小学び医を學べし何某信
 戎大徳和為出を佐玄龍画戎英一掃お傳りて多能あり何の
 以よりう意つまのくお冠首より晋其角の易経の文よりて室
 晋政と弟弟が祝の瑞する此字あり一名探舎晋子傳て雷
 桓子遊川とも画名萬子といへる里狂雷堂而崇六病庵善哉存
 父合高若此諸号ありを性くもや枝次りて人より拘らば

後改姓字

酒を飲ぐに確たる戎尺依るも一或日お尋信文
 此會延ふ仍合せんく苦心ける戎前生傍らお碎けし仰き
 居よりおま一妙句坊ありこ起りていふ仰見銀河底と傳へ
 冠里公室中此今お金持ありて沼村を記し如何と戲言をいふ
 答へ金持ありて酒を飲ぶまきぐぬしと生居晋大器おの類あり
 貞享中照降町へ居戎福す彼堂が池より嵐雪と名しお居せり
 此載るも此流あり或方より一巻の鳥を巻に收るきん佳
 返して聞く世書何なりお初んたり我附雲戎弟するに返るは
 連中のお先集り後すべしと候是能なく巻を交えりお点料も
 返してんやとの答へ料は倍又收るお里と返りし一もい
 たりし今時人その徳をたたくも力もなくて四下り古人お酒
 居るは風程戎驚く甲乙を立ると同日の後あるや昔

非宗子入矣

卷之四

六

生言息すくを記を連伸くこちりまどを欠使さ人中きりりハ
 三味線の糸より細記能借すてんころくといひまどまう記連伸
 匹一三法北糸より細文といひぬてんちんころといひまどまうき
 といふまど又清誓する之深北百廿神明町へ移居は其記此るあ
 まりも庚申の夜赤きとに編くく石城立退てて個度きんごま
 荷ふ作り匂子く記おくく言声小唱を呼り夜申小書申高人
 俄く宅者くりり生息屋すと思ふ屋後堂場町へ移居後
 清ふ秋辨子了景近隣小住保籍の家有り生時の口號一梅が香やこ
 ちる小住生息右の世句何まの集りも又人ぬどもうら人の漏す
 取有り室永田津二月春暖坐深炉の吟さて「雪北曉室」一記至
 くと記とむく病小部一少くふ七日て返に世句一生此終吟
 こと成小りり武後まきゆく種目りといひハ何やまをかりは様ぢけい子我傷む方の端
 可也ハりやを了るく神の世子持傳く一羊面人々の市々魁王公より
 湯る雨の文字出くく是成琴形の市小彫附く物有りあり
 雪ふ秘一並り或時門人きふが一戯言小窓み出一月夜行く
 己があく根記指活の胡麻変此申へ盛くく一三お一あり雨何ん
 なく喰りて持傳り種強くつ人の美ま我書公書傳小酒中をせ
 くの山一う教き一因重司作志伝像を授一出一生を
 藍繩つ帯く剛の中人治一並りり或去小記きり一奇法といふ
 屋一一首の作すく一氣成記くまといは生を記の録る和筆す
 是小意ず生流北傳く一高尚きる抄も常小軟休せりといふ
 水也何小をばる川苔の味「照屋や横はどぬぬ山りつら」一こ
 ろ小拾又奈流や黒本ら全「雪照の面おら流や時冬」秋北空
 屋上の松を誰まうり「うら松やるも鎌食小字津の山」雪北

可也ハりやを了るく神の世子持傳く一羊面人々の市々魁王公より
 湯る雨の文字出くく是成琴形の市小彫附く物有りあり
 雪ふ秘一並り或時門人きふが一戯言小窓み出一月夜行く
 己があく根記指活の胡麻変此申へ盛くく一三お一あり雨何ん
 なく喰りて持傳り種強くつ人の美ま我書公書傳小酒中をせ
 くの山一う教き一因重司作志伝像を授一出一生を
 藍繩つ帯く剛の中人治一並りり或去小記きり一奇法といふ
 屋一一首の作すく一氣成記くまといは生を記の録る和筆す
 是小意ず生流北傳く一高尚きる抄も常小軟休せりといふ
 水也何小をばる川苔の味「照屋や横はどぬぬ山りつら」一こ
 ろ小拾又奈流や黒本ら全「雪照の面おら流や時冬」秋北空
 屋上の松を誰まうり「うら松やるも鎌食小字津の山」雪北

手記 巻之中

日や船院どの一歌にいろ「愚まれくおぐらある人々の地はれ
正交を以てするもの「文を以て横はしおす後く不眼前風振
人五く云はる能はず「云雨や家我回く鴨なく後爽又く如
「夕涼よくと男小生水くる雄枝倫存「稻妻や妙の「東くふ
為乙園ぐ「洋の什是又出るに似たり「声うれて猿此齒必「蒙の
月或洋すくく今令妙子從交於詩何減李王与浩宋「益盛
子て歩る「文婦く家「名月や夏共く人小松の輕「冬來てを
鹿警ふこはる高り奈生從横句在乃月屋「文能借の於意
翁与妙子也一朝不可論昼去り依を後人何るひの思へらく晋子
調異師翁三殊不知離而合者有り蓋「支考許六の樂後儀備
多く空作思を焦「奇我索世といへども意存此條陽晋子
が自放ちるに及ばざるや遠「

服部嵐雲 附烈女

服部嵐雲の流別小振並村小若生に幼名久る助或は湯崎若海
久若助を此世の事とあり長里とて東武とお杉庄原妙云小仕「如阿て
いぶく「回名子人ありん「又并よおお公も執とて「其は「産を信といひりり一年君
侯の信して我第小振里井の端より寄く足濯んとするに卒り
やうに絶えり愛の障来る成尺く「武士此是で米とく愛くあこ
或は口すさみ「う素より景我籍此本小振く山色をよまん
とす志「止ぐく「我種を以て「居宅を返の日常御衣類
雅對等よいらると一書も手に携へば其信れと「一書唯「一
風雲とて小深ひ出いつ「り蕉つ「振ぐ能名を治助といふ後
嵐雲といへる「嵐此庭の言をてりと思ひ寄ける恵さ今交
改んもおかば「と笑ある「な「く有り妻此名を列といへる

正嬌り之雲のくもも横たふ

如考九句

鶯十六屯廿

其角

半面美必

沉香亭裡

李白

木乃少小... 櫻

半面美必

百花嬌語

隊玉簪

翠蓋

弄晚涼

探荷

探菖

探菖

之九

風和日白

行

七世胡...
 史...
 家...

三

生

七

七

嵐方此切ありと祚寂り文は祀さり初り一葉落度空を染ま
 此稀何里後一雪申庵つ小不自軒玄峯雲と号せり一得流
 雪千山を埋む什麼孤峯不白ふるといひ流より水ること常
 に漸雲才丈へ登す巖石の掛あり海く才丈へ申一入る時
 沙岡て云く玄春望別送乙片語今秋归来相見了也即今如何是
 行脚眼と答て云く觀音境裡古案樹沙いはく案無古今色作麼
 生無古今色的一句寄進く云く春色無高下花枝自短長沙色
 を領して休玄と寄拜して冬雲我返記玄海と安り一可寄一地
 後阿り空妻唐猫を巻する子法よりより雪法てそれ融成
 巻す海も種阿る片一人石に増する空持器物いむべき目
 小と生看我喰す偏まごまごといひと熱てと此を改らぬり
 或日書此他形我幸ひ溜り一猫を巻す一きり一日書又返り

東く雪ふ雪ふ此流才を知らぬと答ふ妻泣叫く悪幕
 小と切あり一猫の妻いりある君此奪ひけりかこちつ、ん地
 悪くち重ぬ隣女をとり小生作我告く猫の形先を語る
 妻大り一恨く交ぬ殺いとみ争ふつ人打寄流させて病
 公哉和らざるや睦月はト免の交ぬいけりひを人く又
 笑れてと踏虫一と怪ぶ我忍ぶやを月ぬれ玉を祀とへ此
 時流る小と有り日一とせ重陽の詠り一芙蓉公菊その
 介此名いふくもり友晋子流く感して我生涯業此句是
 及むは己と生あり己又業此業此小老何まが沙の公業や
 此詠と此句あり介と流は里一とあり空を虎作老成沙詠
 集申小置とも亦何と分んや一元月や睦て雀の掛りて里
 不言祝賀還在其中一蒲團をまく寐くる空や東山壁言嘲の

伊藤家可入談

卷之中

十一

句難一世什温厚和平実小平安の意を承り家「君又や家
 多い」とも是れ揃足見其莫逆「世法」亦記身の瘦又けり作
 里獨活「意」又風うろくきて吹き流れ泡「竹の子や思は園と
 起の養也」梅一輪一まん程の暖くは「深浮のふり」又「暑
 う家」初秋始れ動きぬ纏すこれ皆ゆく足見其正風「真
 年山伏井戸小宅を求く久く住せり時「室永」十年十月
 及び家又十有四拜世「禁ち」依咄「禁ち」る風北と上り又用
 取の鳥市「人園竹」は授け園竹是成吏登又傳ふ後世「下
 風」了浴する者亦多し「主使」すこ大なるはや

向井玄来

向井平次宿へ前の廻り人幼あり思ふ後「洛陽」は居
 往年意門「の」玄来と姓名す「風林」雷申と並そ生先

幸ふ屋一蓋一尚村英以所の魁あり「芽形」山は「茂り」
 小忌夫とて「執」も又えで細く「男」子「袴」叩れ来ぬお
 れを撞り「玉」振の奥素つり「や」秋の歌「尾」尾の公えお
 海氣うか「荒」破や「走」里「割」多る友子「を」抄寫死して後抄
 作「て」以て「流」水「使」里「性」成「深」切有る皆人の知る所なり
 其舎を「居」材と名く「句」記「風」俗又「其」舎「を」壁書して回く
 一我家北能法に遊ぶ屋一「世」の「理」屈をいふ「て」く
 一「抄」夕「く」精を「成」思ふ「て」魚を「成」忌む「あ」るは
 一「迷」る「灰」吹をす「月」屋「一」烟草を「嫌」ふ「あ」るは
 一「隣」の「居」居「成」信「て」火「に」用「ん」る「あ」るは
 一「と」風「流」る「て」可「笑」一「支」考「が」後「日」記「の」玄来「の」烟管「成」
 掃除するの癖あり又此を「あ」るは「隣」居「居」後「の」あ「る」は

是より此屋交す此と平といへる者少く食子我送りる者少
 里の時一室永元年九月死に其後松の許六その條を作
 曰く略あり里一時あり流し居す弓矢我控て十五連と終
 たりハ十五年先此六に合く三十年末大徳士何の法ありり
 先妙慈符又覺く風種此名小言ふり京妙小如あつく諸
 子の既一産す南お氣を押し東北此風代後す累世
 此時正風作の眼を死に湖中水まけ里より五月雨とや積葉
 の櫻を蒙く不易流りの巻成おち後括の彩風と眼ても終
 函玄名細みそ忘まは一本枯の地とも流片ぬ時あり赤子祝
 や雲雀の十文字とを申りり又何水の仲秋や一思踏や安
 小も獨り月此客三詠して先妙此年を誓し月賞歌の才一
 古今の秀逸に極里たれ終く一代の秀逸を一友句持る人

片々稀あゆむ一此を妙といひ終一叙句に及べり二十餘年
 彩水の決つり里暖涼名落材舎よ妙をむく石山の幻燈
 唐よ考を付ふんざ一深くむくを雅波の愛我受て佳
 體を解た義仲奇此蘇も扇衣小潮流を携ふ死後の
 博我堅く守里諸生我ちつけ初人を柱く越の流化し
 智く有波理波の虫を選一啼此卯七我即く波音を集
 むけ我大狂一力我よせく文選序者れ一人の進み病
 床小却てと三夜旬他の虫を家へ集め何ある意つ滅亡者
 月日や何里りん去年のあの中越の院家夢ト玉ひぬ
 今年衣文名文章卒す秋九月この郎去く子も死足と
 ぎ此思ひをけせく人名揚我影るるや下累又支考が活
 材先生の挽奇何り終る一略也

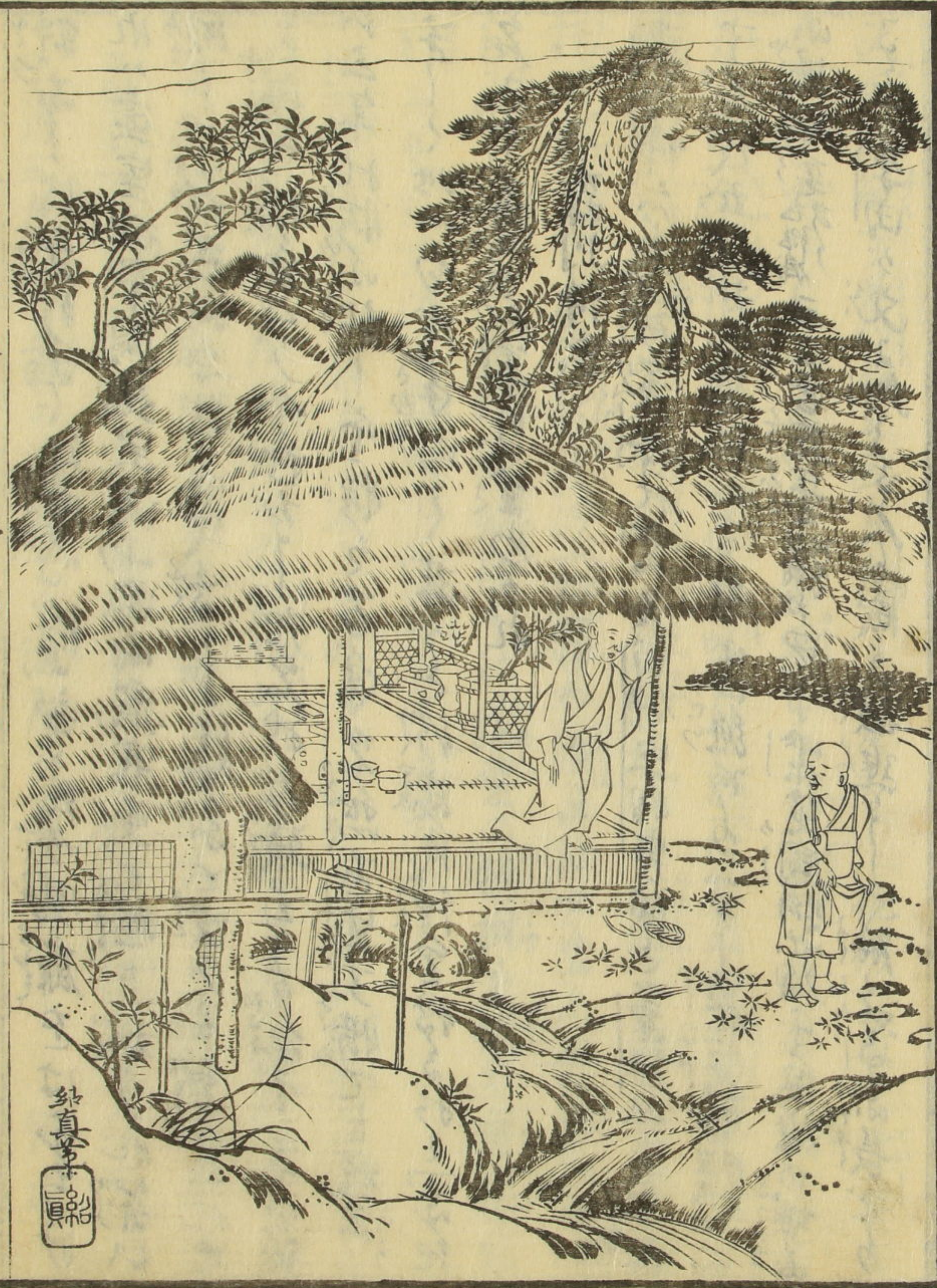
仿史草

借交字々々先代々尾陽大凶の重は方り幼より字成好く倭
 漢を究む躬々内々徒母不依々孝人たる才と生坐る所をれ
 は赤成ゆつり々々々々を魁々嘗て右の指小痴つけ刀此柄握り雅
 一と酒り壮年武成粹一と福を家と成生時の日號多年負屋
 一蠅牛他做蛤蜊得自由火宅最惶涎沫不偶尋法雨入林丘白の涼風
 一まゆる我雲れ有る一ふつふ法華経を誦誦するより他るが
 一とつふ何々法一とつふ鶴門と世んぐ時々興成供みす一我るが
 一法續北述一括着う家一取本を中括本成指はる名中一啓聖
 一色少々假此世の括空際う素一有明一振向ぐ一死字う家一美
 一立々々表の余もちり重り随言句在るの作を可於家永
 元年二月廿二日一と此世我々品友人玄来係成作く

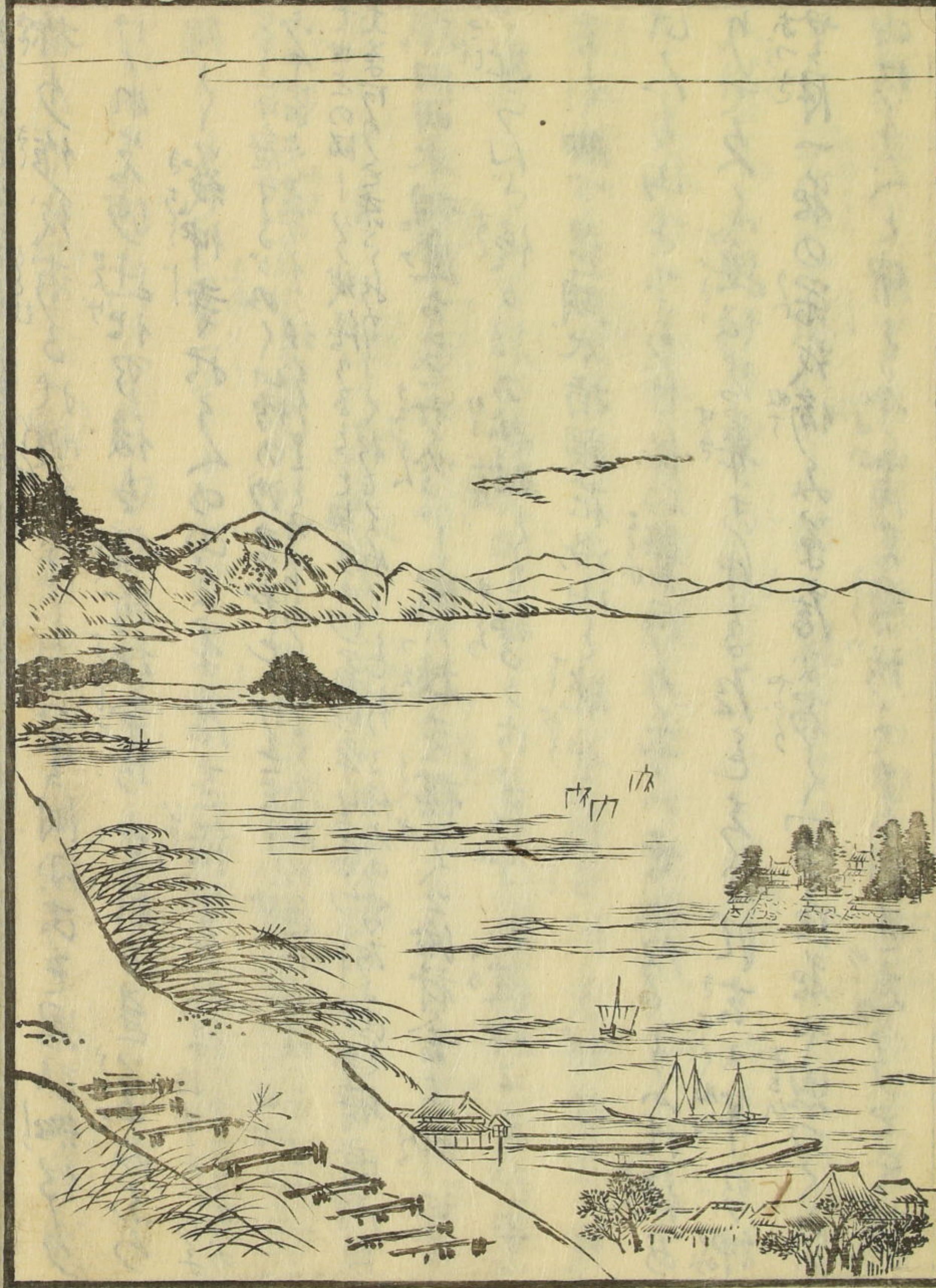
曰く今茲如月来れ日月ハ州庭は残る物々一祥沙象傳う
 里奴と湖南の正秀が許より知れ生り日ハ佳ふはぐ里洞
 止免り孫奴津久ぐとけ人若むり一我思ふは尾張の玉
 生れ在凶候に仕く々々勇猛其名も有一ころや一日お意
 一人を信一竊一君父の家我悪び出送の傍小懸ね一
 きり墨滯又引替らぬる中累活志史邦又ゆり里五兩亭
 一に假寐一先少不具く袖らぬ一あり二尋此改修の中
 一不取を朽一並ぐは百の火燵の上又面成は一向々吟舎ね
 一厚く此人を鉄に先少成云ふけ借是道に進み字はが
 一人若よままんる月成紙だりうじと成とあ入りま下地
 一の艶起る字美む一性若み学ぶる成成は若まに
 一感有りて吟道人あやうく修す若とけりお忘とるが如

先沙津川へ海里のふらまはれ道の句ども出集めはる世
 うち「大系や襟れおくはゆい擬月をさしける句あり月三つ
 入信り小風種のを上をさるふと我陣一は信ちあり
 うーそのくころ我うく一は信ちあり又信波の病床例
 信成者どもに伽の飯句をすくゑ今日より我然後此句亦
 る屋一字名お後我加ふつゝは信とははひりれん或ん
 吹録より鶴を振んとおろしは系物よりけく壽を盡く
 或ん吹録うく決此百おあるに便ち我思ひふと白れ又と
 病人の餘りすは信やとむりすは信我思ひふと白れ又と
 ぬーくと信系一尺信り唯一つらある業流た下の
 室はらふといひる一句おみど支系出集りりこと感一
 五ひりる實り一初信おみか信流てを動め無然

探り作紙求る此信何ふとこの信何ふと思ひ知信り
 けれ先沙津社以後は信所松本のをれりまきみあふ
 然く義仲寺坊うくの山は茶店を結びれば按するに子
家と信屋するがぬく信の沙信おもろげとてい申されり或信りけら
あや信あふかす信ちり信と信りて初ちで志何何く双後すても信信
て世との信りり信信りくおとれくも信の平生おつて去東時時門自
 啓田田水相違ちよ打吟一或ん杖を擡り信材舎を叩い
 飛らんご信り信の松結とも信り信り信り信り信り信り
 下脚に下登湖、水指頭花洛山と眺金我信に一信全一我
 けん々山を下らげ信の誓何り予ハ世ふたぐす此信あ
 りて久く遠坂信信信信信信信信信信信信信信信信
 昔月一信の深哉信信信信信信信信信信信信信信信信
 山坊うくと申く今宵信信信信信信信信信信信信信信



結真

斜あぐに文りすく小雷鳴地よを吹風庭をはあぐりけ
 れが虚空欲穿閑是宝満山雷雨震寒更と興一おられ笑ひ
 照しておまきぬ身おれ成鳴くくはうふと笑え一寄集れ定
 毛再おびるる今むち一記名おみ残るる百九十年の笑
 の三年此恨おれ一を恨るる百年おれを生す惜ても程定
 ちくく此一句成手向く来くと涙あけ信を信るおれ一ふ記
 名まきく表や三年の生ゆるれ

森川清六

森川清六とは江戸幕府の士一名百仲字羽宮氏と云阿松と自稱
 する者哉五老井と号しおま井お四郎河少一草字藤野也二
 小揚揮豆お三雲花雲四一紫芝園辨は身を風雅の癖あ
 るるの李田が文は知るる人を成り敏達くく融るるお長ぢり

又画成解す意存も画と云く沙と云く一能借ハ表を米子と
 奈はと出けり生れお句すと興せり一本箱と成屋記桐も若
 芽か今夕限の表れは情や帆くけ船一口又月のお波さ浪や子
 奴一竿と死装束や古利平一着纏れ万を招致お盛り哉一欄
 杆おおるや葉れ乾法沙一初霜や治承江中若人お入りの
 色とり津あはれ沙翁双後を扶送愛の櫻樹を伐く肯係成
 刻み是哉大津の智月尼一福る生又おいそく

法床おおせり持おはせり此一一目お交存の拙者よりいすこ
 す知と云け居れ像も皮延引け度存も手おぬれら且お
 きお井此古本とて別みすひらせん兼て大ちも像別と度全
 コダしてても初集おくけおぐくくお又おお中のおお
 十月三日 表の後像一満屋記葉もち一 件六

智月尼撰

生恩遇の海を志まばるる形に如く惜むるも晩年癩瘡
 斬りて一人小面する子あり適道我言んと召取來る人可也
 ても屏風を志記すく遠去と成許は後一年金塔の菊子い
 と何て面をせんる成れをむいぐで屏風成信んやと病床に
 迎へて飲酒おねよぶる教刻磨りけ後く奥氣考くたり子
 子ちろく考て研破ちく砂りく後至合るは進バ病何んく
 事不恐る子小徳也くも一度菊子おお見えを落し懐さる
 風推し控ての大丈夫ちろくとい人評し合席とて正徳五年
 小死後後焉の獨り一時打破屎糞壺芬や臭氣供梵天下を
 死ぬるゆりそと思ひしお上手も死ぬる屎上手ちり此子徳身
 已まが成代句後して化を皆藹物と思へりあり平生徳の

後申一丁弦を記く入るの我れみ方里に言ふまじり彭老後
 まで膚撲お目逃りけりい伊家此一奇物と稱すべし

東益村支考

支考を考波お此人は一後後若ふ入く徳義自といんりハ
 冠の冠より吹毛羽世春三月彭揚牡丹花下風といつる傷我作て
 宗つた言信り未だも後ねもろる東益武寺の大舎小頭嚴志
 備まらハケ條の蒲葎我能同に成り法着生也を妙み違り
 得機を控きたまるとや嘗て野陽山田に身成置りるが何と
 風衣に秋み交る時り涼意その方枝借之能借を勤く蕉つ
 へむ功成く阪口すといの見龍とい醫又徳り此名白狂
 二と飯又飯るありて及るおとる子三順の骨小去るる武
 花仙名祢あり坊号成東華西華と唱るい何方道逆

す所の僧より遊小在と記ハ盤子と呼ぶ家又在とまハ初子老
人との支考とのくるハ舊名ありま字二教に涉里然又文成
以く勿及す著す和十海古守抄等備とあり確備有りそ發
句と對てハ亦と洋ハ魯衛之政耳「斤枝又豚や加よひて梅馬の
灌仏や目出と記する小古はあり」惟子の形を安し淺五百「牛馬
声小略」月夕うゑ「惠んまよ存のせで獨代守はしめけ子僧形
残替す傍律をきて居と里るが政一衣鉢を解の公記する時
「圓」此禁小使すれば金判り系中比肉食ふとの杖渡も有りを感
法例いす「免く懐陸屋をば事再りちるは牛とあるが」と
いつかに答く「牛小在る合点をや招席夕すごみ一牛尾の巴
靜と併歩一はうるこて著名は後一和「棄るなりぬはし」も去
此尖を去ぬといふと額をうく形石字解美の堂殿茶小多ごり

雲雀の妙喝するや「笑えく洋くたる海止と書き交
ぬはぬき捨やも及ぬ風宗あり靜村比脊中代叩い
一句何るはしやと答ふ答て曰く古人も宗小違てと嘘する
とい「り初十かちる変ゆくハ句按比登す保梅は何と
今果何才ハ宗里とも有里しる時を去の長徳「海ずん
に實小違我はく人の控中とありと靜と感とて口を
閑た里とくや喉拿はく在善人海りく通る「去年代後
る財小尚りく宗風を慕ふ老多く後世連綿して流名
一流代唱はく是すこ此老が徳を「ずや

曲翠 附幻住老人

曲翠 賦之曲ハ江河撰新のま「馬指堂と号に切記より意つ
小遊ぐを老手と稱せりる一念入てをりる答む由茶ふ思ふ

夏は雨つゞ居るり蟾跡「了可る声も枯れ」嵐うそ或年了
 深川菴慈房此後を付ゆく「菴屋小沼河らひ一沼やはれ後
 ら此回勅旨我氏有日若君寵を授てより上中壘塞して堅
 切らげらるるも重里中多くを此がなる一昔めら侍
 る計つれく我家へすう一入息悲夏夜責く殺害一を身
 公ま月く小司殺してけり風流此名を知られども忠誠の志ハ隠
 れとりの事破談は和奇残能一且菴紫雲の名手方り破談再
 照といふ句をさく菴紫此名小附一も欠掃名も歎まてり
 修了此人又その修父幻位を人此閑寂を樂み一り菴を修了
 此地了生雅方る夏夜知く侍寂まか此の如一名家と稱
 一川原一

修徳材

修徳材の清海此人素家富有を王一うども後を志ご分る一嘗
 て蕉門又遺遺して修徳の狂者と呼依風雅意仏をさく風狂して
 畧に生瀧破色兼笠小風雨哉凌ぐ性く地所の吟あり
 「水多やむふれ岩く津ういつい」長ぞや若根若松風雲い
 ぞや「彦山のは赤いむましく小妻う赤」時取けり走みりり
 晴みりり途中彦根を区る件六に地り残とく曰く吾
 子影すぐ一件六出水残一彦山此句を巻隠して
 天狗集と名けりり彦後の夏夜里り會殊了「笑えくる句
 「名と利との二川三つあり子梅松仏」梅の世河ういの赤いを
 あうみののを投逸虚野おのふ屋一一年西玉の修の時梅
 鷹坊くく小志るる人あましく立寄あるるがえより狂僧此習ひ
 福を結び肩杖綴ぐる学物を承小候たり彦山の玉を

又く布一疋をよぬ材よりよんでお伊紀或旅宿に針く布
 城おし着物に日月縫くぬへ残を信ふよんといふよぬ着
 いふ紀縫ききせぬ材登路起出り白り立席く云く移き
 物着意一を衣く人されよと垢附くる古物を着る人
 又ず一て去にりり又又又渡國往此州あり休能ある宿るよ主
 逆以妻を運くいまご度安の飾を収多良小社河まご衣柳
 小掛並より下め路とく起く又るに客宿には屋おけ衣柳
 此振袖を日月共より柳の彼材の塗へ係よまよと衣の
 若く主客く性給材人着物する小器此若く何んは衣了と何
 らんとする人此くく人存居るに果してを取よ存く茶
 りるの今路早より立出へ係又性風身小のく凌ぐより早か
 立席く男女此わらわりの受ぬご是よりや何んと修達控候の

振袖候候く返一た望よりや又何まのまよや存り望姑く候
 若此頃久く打籠るく河より日を或人今宵谁家小能階何り
 いざとせよ人と勧めける材お茶を我目おく起れ目入て休坐
 契系給飯由でけ恒産中みか能階あり候了候かへ能階
 せよと何復どやと答へより殊又人我とも志まより日陰若
 と八世僧此より系係候一

勾堂

勾堂に加別卯辰山より閑居く柳陰物と号に常小雅波何り
 て意符候候と云ふあり河舟も其深志を感ドていつと一み
 深く義仲寺より世子此より兼好此画賛して一秋の色糖味香
 盡もまより里よりと八残されぬ此の徳待茶小再我捨人を深也
 此妾思を拂お捨く懇法能と日月も持師さきといふるん我

庭里秋氣零落此言我述多体なり初め新六此柳陰影なり旅
 痛のる我休くいと睡くうらひ「愛る柳阿るドも我も陸を愛
 ちがふ旅してま出らる一年元が口号「後吟を唐の橋よりなりなり
 「折角に旅しぐせよ月此雨又武財「梅が香や分入る里を牛此角
 といつる名句も阿る一

秋之材 附 李東

秋の坊を金塚小名言は風体名隠士なり「凍つ死を凍つきふぐ
 無此風をといつる香深も阿る一武財此子湖南の幻位唐なり「材
 ひ寄一小沙箱の「我高を改名小なりを馳走うかして一夜二夜の
 飯を味を許しき一が材も適者此身をればとて堂々迅速のり
 いこ鑑一「物陰一「麓はぞ尺送り「屋がて死ぬ糸色ハ尺之探
 此声と一勺の露海小立おまぬぬは一「飯ましく交遊の中も此枝

神了「時あり一「何一「物法「道その事阿りく始く申阿一々
 了る一「箱妙心「御の足代屋すぬ水枝等一も對面阿里一又例
 此申されぬ妙多し人「沙ばりりも告げ一「を坊で一「箱の寓舎
 一「満りりく強日「強士と會合すれども水枝と云ふは「何で「横る
 糸色も糸り一「ハ「牌「強とく「糸「糸ありと「皆感「ド「け糸と云り
 又糸妙より「返玉の「法「音「屋「障く「本末「事「多し「も「小「三「衣「一「神「高「外
 室「糸「線「凌「尺「紐「手「段「一「固く「刺「子「此「許「人「度「を「色「と「一「言「け
 れ「ハ「凶「より「下「我「糸「ぶ「ア「了「物「打「荷「ふ「人「を「恋「一「き「刺「子「一「一「中「會
 け「其「ハ「凶「より「下「我「糸「ぶ「ア「了「物「打「荷「ふ「人「を「恋「一「き「刺「子「一「一「中「會
 我「箱「里「裁「一「も「嘗「て「の「風「人「を「実「一「了「清「室「を「も「屋「一「死「後「了
 糸「淺「布「を「多「く「殘「す「の「ハ「ア「の「め「も「着「一「と「申「一「ける「糸「終「焉「之「正
 月「四「日「あり「兩「友「李「東「材「以「來「里「強「日「物「陰「る「も「於「此「如「一「材「因「く

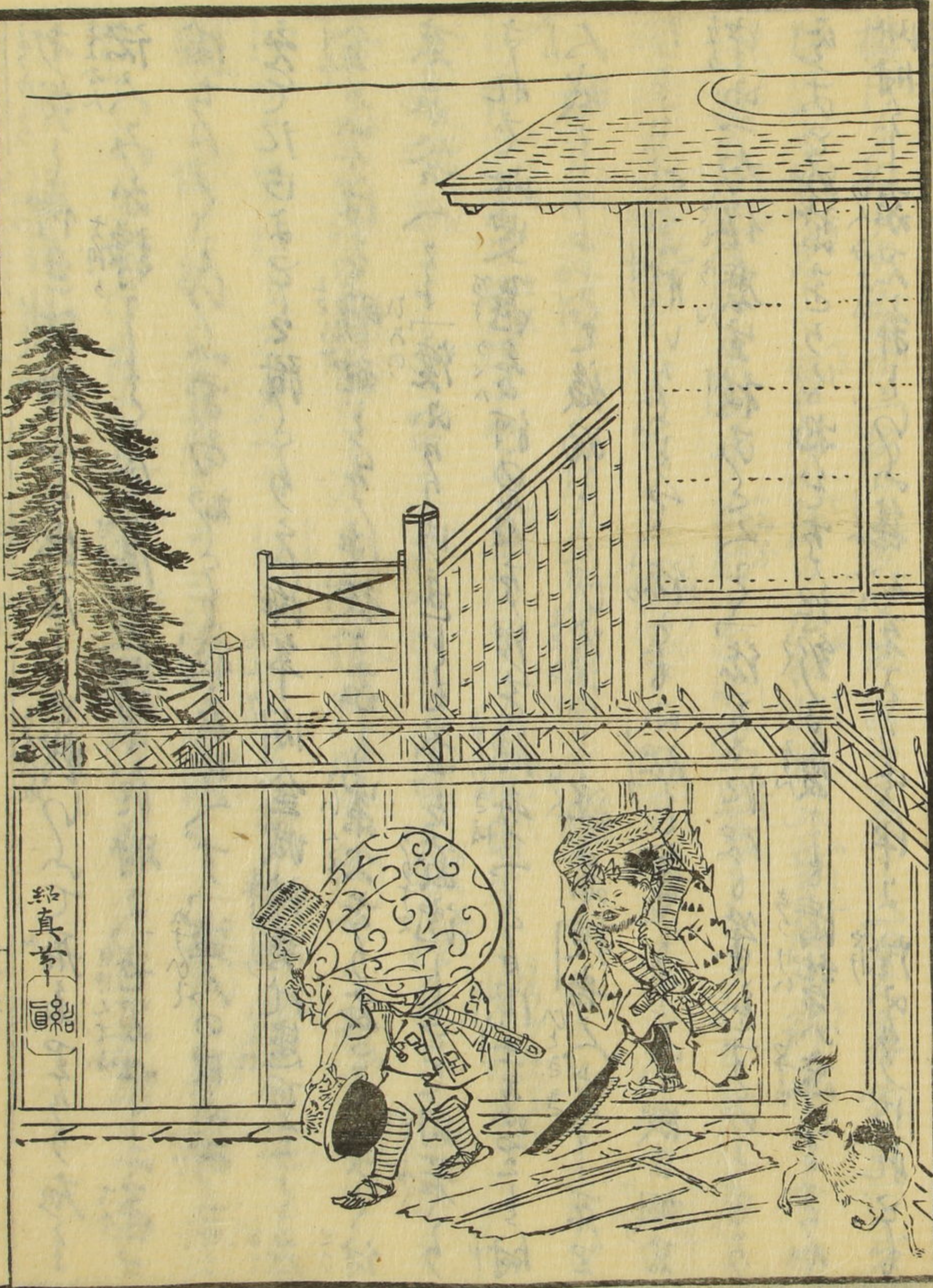
我曆作より嘆息しとて「正月日方より月世世我をふり口にすき
 びりと又しうららしくむいゝ息をえたり李東鑑死ぶがうも
 平生自にを忘るるも忘るゝ多しと感涙をほせたり「福
 つむと不せく失りり秋の村とつわ我を向くかこれ如く舞を
 せりや

李東の金樽めく十村祝詞といふに及を初むる「能清能鑑等
 此高尚の遊ぶ味をさるるか古人も官の俗物をやるといふが如く上
 小ま月人のふ風海よりたれつる宿人へ「忘れり遊ぶはつは
 冠を掛去とて「宿も涙が空をりつ露の着と言ふ声みゆしと出
 ぬ渾く心中堅固の物人といふべし

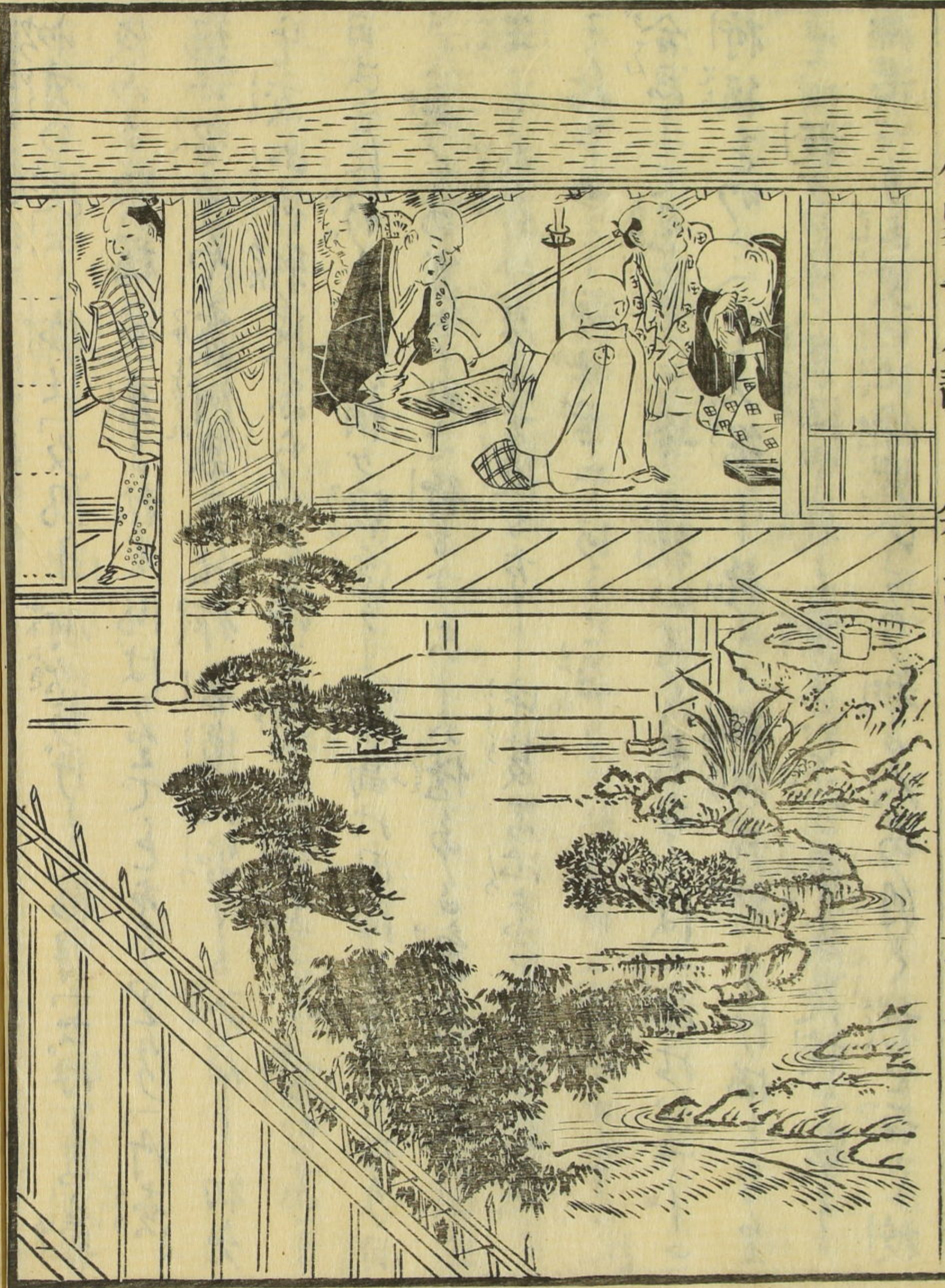
磨工北校

北校の金樽名磨工「〜」牧童が牙をり意存その能や我感て

物才の逸士と称は「夕風より何吹りげく猶月「去は〜や暮
 我ある一ハ様意「来る秋を風はり空でもとあり空より「竹素
 酒小智をや露時五を此作去嵐此室も入る〜初冬
 生友如柳形我系ら〜酒を鬻く枝素より嗜むあり
 目まににゆく阮籍が墟空〜甬畲此風海を空〜たり日
 く夜くの夜ちれた柳もすま〜ハ倦多る露色をればけけ
 後〜云妻は度此才俊も有〜申妻若比空をりも枝羽〜
 そ此下ぬ〜種味嗜や何〜と存る〜に下ぬも酒れる〜を以
 合点〜て是ち〜と答ふ枝い〜く是ち〜は一杯はむ〜と
 柳後を切〜へ〜大第〜強〜酒柳我伴〜け海とち〜を
 空時枝が口号「復酒や我と棄あび火の車或夜枝が家〜
 能清何り三更の比偷見〜らり知る人あ月〜秋と若く枝



紹真草圖



打笑く何ぞ殊掃ゆと出だしと戯ひて居ぬ里よりあり
 諸人みお静しと生席を山座した時又「世万吐しふ葉が
 浦ちんくといふお句おしり投る河へす「盗人の目お掛らる
 免でた由よこそ附くりえ深草間金城燈失此患何ぞく房
 舎ふりばる腰紐とち海枝が赤も累火きり夜もち多く付
 束家答へく「燈ふりりは世ども益と云渡してて自若り
 されど世更飛る河の底を記を能弁つてる風士ふ里と時
 人感くるとと後始とくび火炎く連る小後吾人先く東王
 むりー此氣情いりるとと「法ともお取と等もすみと成る烟若
 申ふ一向作廢生枝あこく「法もに取も等とすすみとちり
 生あこの世をさうく物ぞち記初る變も清秘るハ忘けるをや
 此時一「家入舞といふ集お来りり申よ「燈ふりりはれども

櫻けりぬち支考「梅が香や海川一裏く燈入存牧童「うん
 ひはも笠もく笠れ小座の座北枝又藤信お掛りく奇仙
 「杖提の祝儀に系らす水麴うか枝「曇りすれと印此意若
 時後「扱裁る人の笠きて杖家く支考脚或庫の人は後若病床
 存重日夜浦りりたる夜を空とと枝をやみもたう「汰ひ
 けり犯湯粥の世結やても為たうらる兎角する申疾篤くして
 治療術をうらりと嘆く文おゆりは若く命後まると受何そ
 下く堂上ゆり強家よ入く生権杖叩き後吾く我を捨てと
 ばりり生流と大声ぬを泣いりりり扱了と此種ち絶とらハ
 別く塩り種とら日板ちりて初め小磯中「藤もあ舎く感
 たるとちやけ世を平生此交王思ひ願うれくちらうー

偽治化

借浪仕之末つ豆一如大借正の連枝山にて紙中井波瑞泉寺
 此位職あり一年蕪蕪此推懐を去るふく或夜をそり
 落材舎小て美面一そ沙才の石堂後波む此よりを其角
 砥波山集りも此志の免でくそえぬを予と一こは思ひ
 ぬる中我級すと記せり生一坐此夕残何りめて必廟集と必
 一分入を鼻響此声や雄上川一牛子の身みちちて時多う急
 「表侍や抱一掛小虫の小口え深十六年壯業一そ夜に
 鳴呼ま一いふか

借千那

借千那と江西巽回本福寺の十二世一そ法名我成式上人
 との嘗てくそ心くそ彌養材と号け生性悟敏達寺一蕪の
 此廻禁と稱さくそ「邊坂のうとほるはや初桜一替れく此能也

形や梅柳一字灯笼をるハ物う能極くか享保八年一寂に七十
 有三歳あり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能一そて画と細子小長せり能名宗
 字は「め」諸言は後い後蕪門小遊ふ業若うそ一附の句に
 「妻小もと幾人たりの小橋踏生身杖蕩一そ」杖接小味まれ亡
 命するもり殺度或財本首此山申ははよひ入里高るつ死本も
 ちく行跡小倒ま体一衣被るか破鼻く臨小を竹此子笠を
 加ふ里身一と糸堅一杖杖はと以食小を錢た里りれハ「食
 彩とちうられぬ按山子うかと吟して名我破笠と改くそとあり
 空より江戸一帰く晋子小寄富虚栗集は包食「もの句何のくは富
 するはと年久一そいふき後志赤きりて津軽赤く百出れ

食禄を以て延享四年八十餘歳にて死するなり

路通

路通の何れ所の人を尋ねて我知るに若くは一に叔父の何れ
路通一人を尋ねしに我意存近江行跡の時道中傍らに物
いひふ言風流の流し及ぶ幼少より好み一掃形をればとて一
此奇我麻衣出て着し置に此も穢くして一落とるる流
を流の流しをばいひしはも茶井村をあらはし一掃形とて曰く我
まだ君家へ侍し一掃形の季吟の音を聴き仰見發露哀なる
傍らに小令ハ能潜のみどり形小遊く生涯此余みとに油我
小後く尋ねし一掃形の憐れふく生より途邊の名をば何と
ら尋ねし一掃形の幸く皮をぐ掃形をいぬくと人いふれ
年此當少元流形掃形を瀧中に出産して一掃形を川や海に

此秋此志一遠ふる何れと姑く少中流より流れ
とも最終馬の流し又生罪を許しける此子意存行跡
画みづから出協所をり流しに或出小義伴寺にて亡沙遊
陣の時此子大津の使客我流形を生掃形を材とていひ又伴
丹此鬼要同ん一掃形の奴形曲をせしと記さるハ大いなる
漢王より流形より掃形の曲水へ送す又此小色
路通より大坂小く置俗い多一たるとある中流んは一三
年以流形より尺八来る夏ゆく今又流形く小足ら流しと
此流形固の流しを感すくいへて平生此人をして常
此人が流形より我を流し何の不審り存なくや拙者
流し不流形は流し流し流し流し流し流し流し流し流し流し
流し流し流し流し流し流し流し流し流し流し流し流し流し

二月十八日

曲水橋

おせ銭

摘風尼

伊賀別上野一摘風尼といふ河風妻が女一て回廊
 交回氏へ嫁するといふ交死して後難髪一能指を以て宋
 さらば意門北よ手なり空帝派と嘆え一の名月や力これて
 ぼつる極ば一ら生瀧若句我撫く本禁集と名く世は形れ
 ず惜む屋一菊いおと衣口小在く忠たつと至一時衣振若
 世活ふと交らまらうとや後年深川の席へ使して能指を
 といふ物を指すうり文書に記すき極め已制せし物殺あ
 して右の肩に一寸をうまみどり記振ふり東彌子不空家
 生風依すて類系一可り安又果は

智月尼 附乙別

智月尼を江州大津郡若人乙別が母なり親子とも風雅をハ
 まはんとて意存我沙と凡一年乙別が東行する我送るとて
 「わづと才人入ふゆく極を不ニ此寄嵐茶を憐く」あか
 来去回一けり猶すむめ「吾一子え屋す免を憐一本」
 れで丁を命惜ちま様守身此老衰をうとちく「我形も親
 小入ゆる枯形くふ智月」あか海山の香海を月る香吹くふ「昼の
 昼する此和ま味冬玉うふ乙別晩年此尼沙小びり川く紙
 筆残備一帘子の袖く記合せく我一形尺と成屋を指虫を
 残一玉人とをむ新臨流古うも六十ふちり記尺小形尺
 を乞まきいと力ち一と戯れふがう出て突一とをまき
 沙の死期を何らうとめ計り知れりや浪をすりその愛

戎昔来りしも今年此よりふりし

經屋松風

經屋松風と江戸村人との身魚家として遊る夏里といへども
 生涯耳龍舞の夏里一見仙風と世又蕉の遊ぶ雀歩こ
 号す「挑灯此夜に遠赤一枯字」がうぐりこ抜神の齒や秋の
 風「舞」や雪目くの意此出来「け着」も又探りく一回
 子「沙海」深川は唐成むすべしは此奇殊小力を辱せり
 となん一年毎に送別君句又「何となく」芝吹風も衣衣里
 素裳水水を降して秋ちるや冬衣衣や作者も去るは只
 朽りふるの深なるんといへる里或虫の沙此致後此の人支考と
 絶交せ依り「旭す」大なる妄誕あり牧童の巢刈篋集
 小松風より支考人の文虫有り雪洞といはく

悪くも世より「屋」はくくはいづるも我と吟「一」を
 我を慰むばうりふい後子「はる」は「一」ある此中にと
 追答は句我清中「ゆく」有屋皇の「以」我「お」著「の」り
 「改」此「す」福「も」連「者」ふ「り」ゆる「復」の中
 聖立京係十八年八十條茶「一」て死せり

野坡

高家野坡と越此「あ」妙の人「は」ドめ江戸は遊び後浪茶に位
 す「標」本社と号し蕉の「書」徳小附合の「件」我依とる此人と
 越人「の」新「く」係「者」古「り」こ「ふ」世「を」我「向」向「ふ」こ「妙」京「り」こ「子」親「能
 此「出」まぬ「橋」子「り」あ「長」松「が」祝「の」名「で」来「依」は「茶」う「系」「は」き「掃
 際」して「う」山「茶」寂「小」り「り」け「は」の「垣」高「ゆ」ひ「急」や「神」去「ぐ」れ
 或「夜」盜「その」あ「る」愚「の」り「坡」お「美」して「云」く「我」一「物」の「行」く

ふー唯桑一竹こまゆ一壺りや花はむけれバ柴抄禁々
 んうく 菅原すべーと塗るふづ花をうら 彼世うち梅つ
 松よー 菅原此名は我出れおとと踏出ー 我席の権
 巨窟ー 櫻里先と何るを忍つ事何のさるうやと字ふ坡
 糸く此より答ふた何うバ今因事の有極も句作を何ん
 花やと披すおのち一恒満る雀をうらく言れ江と塗太
 感しておゆ起けり主人と成り扱るるさ此の如ー 昔
 後志沙の望名席を言津時小梅ー 句ら言津時の子と
 祢せり空年壽枝をうら

哉智哉人

哉智哉人々尾陽 獲株位す舊ワの老才有り 尺海且バさう
 い居ー 夕う辰み一校名本の斗里す知るる若葉ふか 露をうら

抽替らるる牡丹うか 稗の種れさあー たる氣色うあ一年
 江戸ゆく 句を句が句見才といひ出我葉ー て我人が送別
 れ句ー 一校と此の公居すはよ終世業此意といつるに 一校時
 は風と種まにけー の花とぬー 一と此人の涙小をぬバける
 沙舞も色を軟さる 情去ー 江沙の砂拂は権ー 信る約
 何より一何ー 一校を此志と覚るうりー や若花女おごか入
 きー 子も有ー 一校を此終世何うらげるる 一校憐く 後の形
 拂ゆるを言ふ 一校玉の何とふ久味を成りー 一校後 一校
 一校思ひ切る時猫此意とふかおちうり 一校此 一校慍
 よみー けん後の撰集は此句我バ加へ何りー 一と年々君子の
 情む取あれご又此危るー 一校此もうと候ー 一校まを此ま
 端成叩く 一校此を知れよまを氣ぞ此人の風流をうらー や

病歿して後、著流の支考先妙の爰、老滑程有れ傳ふごとく、妄言
 を撰人、生也、松撰り、去多くおして、古武を塵し、世人、我欺ける
 として、方了、怒里、不猫、陰との、い、去を著し、く、洋、く、生、程を、弄
 せり、實、我、臣に、流、切、あ、る、清、潔、の、士、と、世、變、の、り、ち、ま、る、ん

涼菴

涼菴と、歩、河、山、田、小、在、位、く、神、嘗、を、り、慈、の、小、在、位、を、乙、由
 と、名、氏、等、く、良、室、友、秋、何、る、ひ、の、神、風、録、と、等、す、一、替、れ、も、應、言
 巨、應、を、り、今、昭、妙、も、一、淋、げ、げ、く、呵、呵、小、あ、る、や、極、老、成、爲、徒
 織、一、難、一、あ、る、一、梅、阿、り、後、り、梅、あ、る、が、あ、る、り、此、句、老、成、爲、徒
 一、大、步、此、子、小、阿、後、り、く、る、曇、く、か、一、身、の、上、紙、只、去、存、水、り、り、ぬ、存、意
 至、く、世、空、り、逆、死、意、人、と、仮、神、く、一、等、履、を、知、く、お、て、後、ら
 後、人、を、く、く、存、ぬ、一、む、る、に、不、阿、と、ら、ず、剋、を、を、取、の、意、す、り

直、了、思、き、く、流、此、東、山、一、ゆ、紀、生、す、り、横、州、流、古、の、横、意
 一、く、又、う、り、く、と、終、小、長、湯、後、で、た、り、り、好、一、と、な、ま、堂、室、一
 聖、我、老、雅、人、と、稱、す、ん、一、老、後、危、言、小、た、お、ん、ぐ、つ、人、松、上
 に、去、ま、里、辞、甚、誠、乞、ふ、老、眼、を、再、犯、て、一、合、息、を、や、生、阿、り、ら
 き、れ、子、親、と、云、つ、つ、又、操、く、一、一、之、曉、の、生、を、依、る、り、や、と、再
 梅、の、聲、吟、ゆ、乙、由、く、一、つ、小、在、く、此、初、又、信、く、何、の、く、一、が、ひ
 や、阿、り、ん、生、燒、此、松、字、に、言、好、又、味、り、里、け、是、が、首、水、争、我、説
 泥、せ、る、時、後、を、小、息、を、絶、ち、里、り、り、一、出、了、一、世、り、我、犯、つ、く、
 痛、症、を、患、く、死、せ、り、と、良、病、中、の、吟、今、後、で、八、人、が、居、む、と
 朽、り、ひ、一、小、我、身、好、く、人、小、か、く、の、仕、合、と、生、儼、法、を、る、を、去、く、
 以、て、つ、後、又、傳、ふ

香良

別良之伝後傳の聲あり一とせ東武又遊ぐ蕉つ又入至
 一時小名河り「ほのくと鳥居むや密此妻」果をや暇離れ
 孫山一垣百尺のはふふちふつく根亮ふふ「木水互に及と河意の
 市北はま振するに桑の細道は別良之後成屋みく伴歩團
 長崎といふ所小ゆり里阿れは忠づめて初と有く「ゆたくて
 たふま休とも是秋若意又いそぐけこのの然み孫るこのの
 暇み雙友急のあて雲又ほすふが如くは河阿道は河牙の
 難信思ひ屋は屋一掃る成或は此人北越の由申して河意
 桑小遠引列れさうといふ大ある漢ちりり若孫集り
 毎傳ふての吟も「たがみ休て紅一は流汗拭と是等よてと
 る此志の程ちるは

系回字古

系回氏能名字古和別郡山北重屋たりや小より懸懐人今
 遊より屋小傳東証書古人扱はふひに通るるも或時人く
 打家至梅の野いごとて叙句せよと河北材の云く「妙子進
 如く「先うけの急の手扱や荷寄梅をく先先磨は流して
 後愛して意つ小入取貞享中河孫右勝小掃つる時その言
 に流ぬして一日松屋と三津北奇仙河り「去るる船中此意の果は掛
 居候とありあるの絶も失くするより後亂種る果の
 ぬり抄ゆる集人あきく出流ありをいり系は水バ沙牙の初を厚く
 及成思ふの志流やしてえ孫の比逆又意つ懸流れあ尚と称
 らは河沙を及後にもそ遊慕他小吳たり孫の若流を初りて
 已ふあして「大系め小意せは梅の急けり金津川へ居く「河つ
 竹北村あや席の江慕人清を「面をち流ひく柳れ系系く系
 或の「鳴千多れ死ふ此流流えその殺り「つむり「殺く捨ふ

蓋面黒



件日与弟子松國有云
依之能満于時
翁賤別録此一物
右深秘石室云

堅一尺四分

栗穂及葉昔

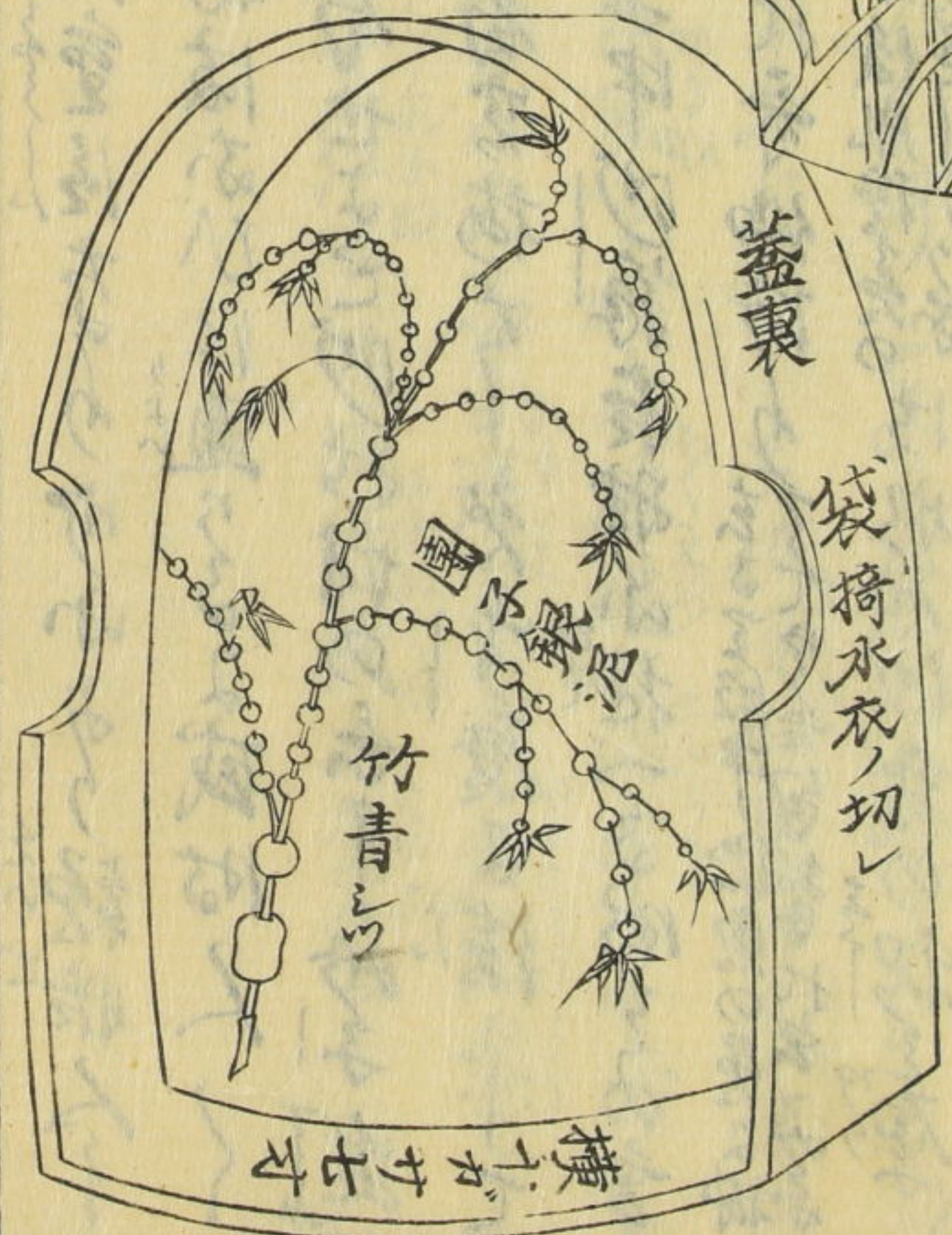
三月月銀泥

山小崎

頭陀箱付

貞享年間慈翁蹈首
山之途道過
郡山而止於宇衣家十

蓋裏

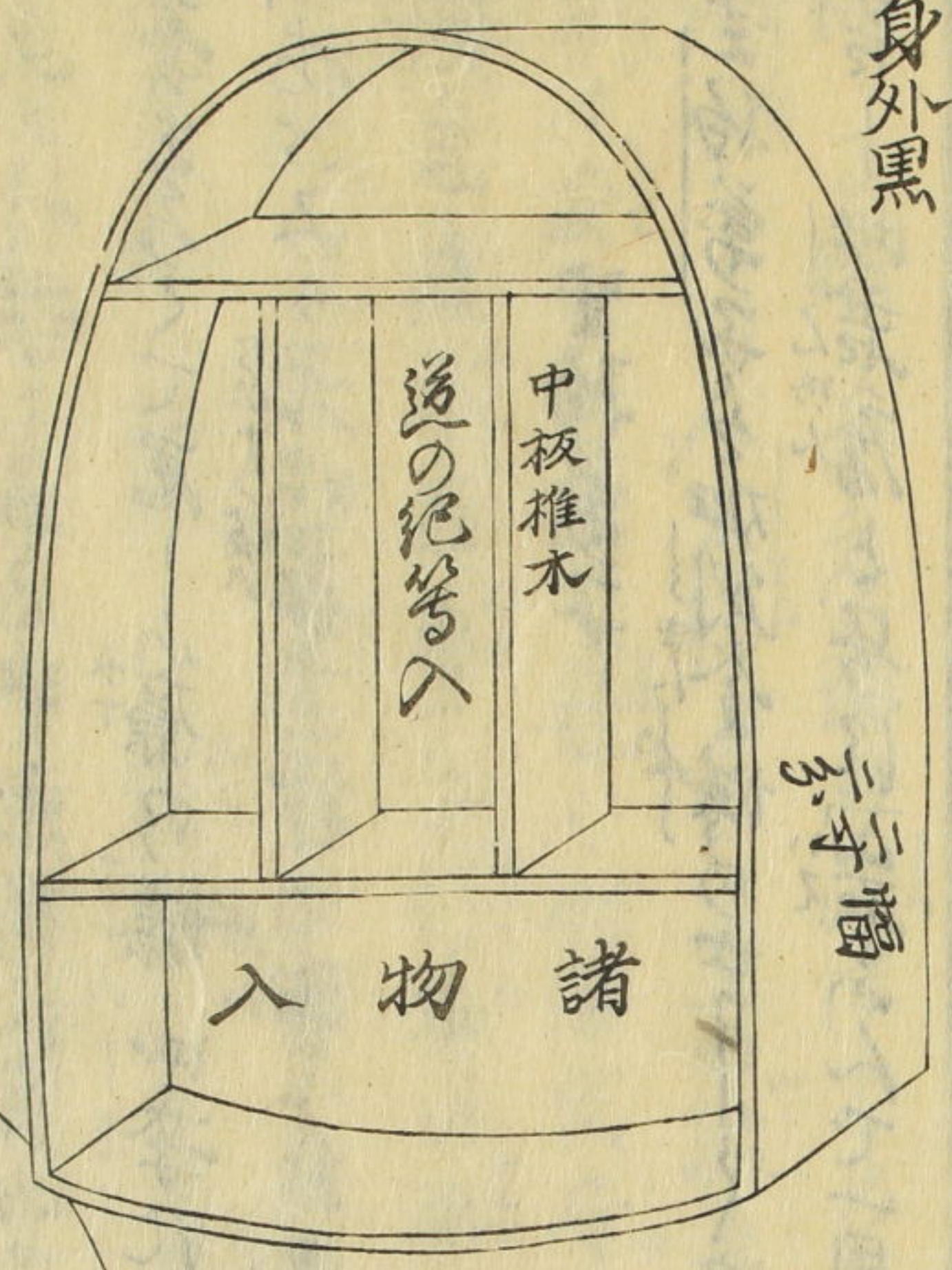


袋掛水衣切

竹青

斗叶斗女

身外黒



山小崎

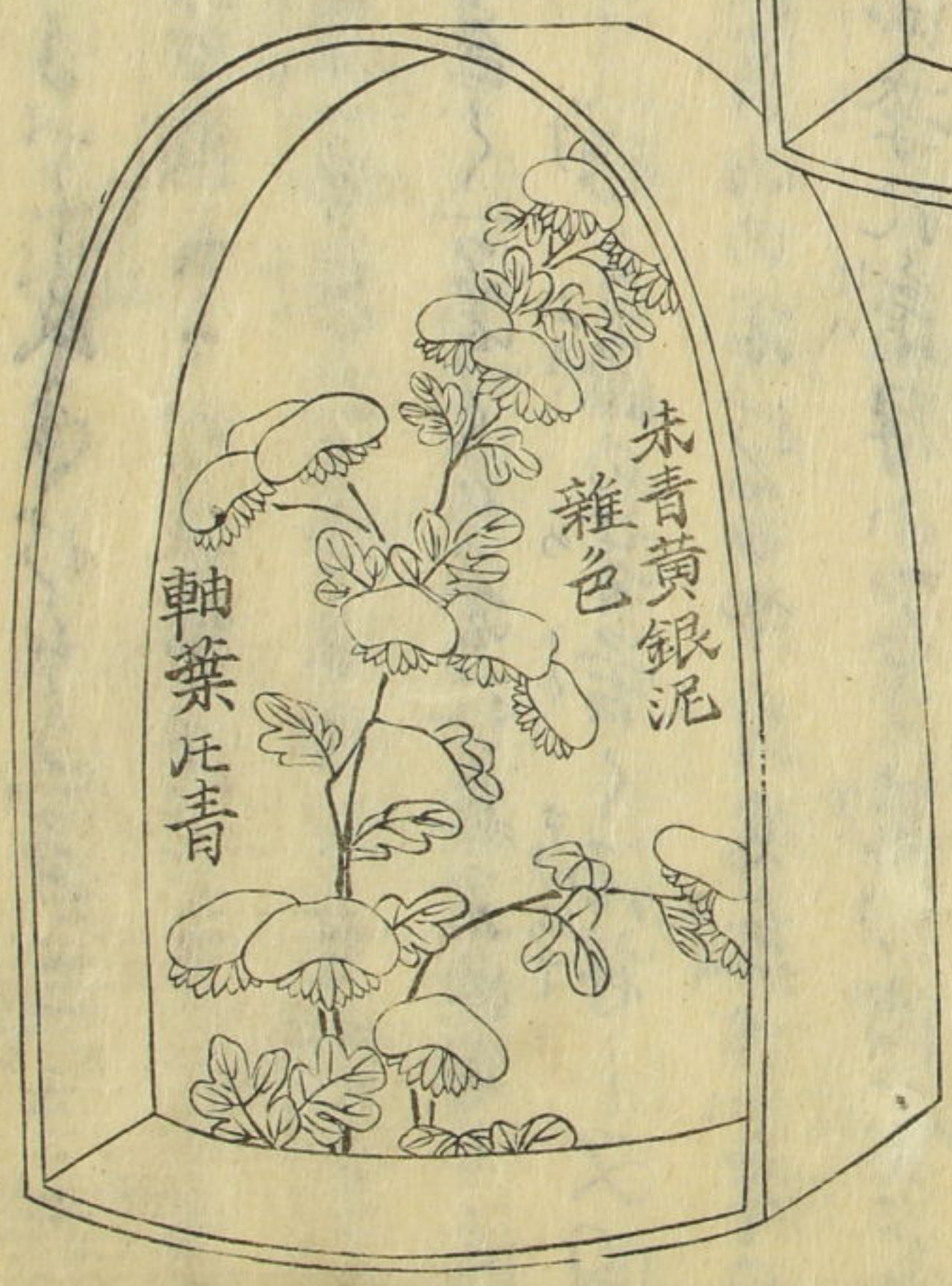
後有故逆為

正正康士有漢嘗行
而得摸之跡
火止之兵色為下附屬

怪物者不
上天下

焉今依其家紀以識
傳來之正尔

儀伴采人



朱青黄銀泥
雜色

軸葉比青

夜一糸子素裳何れに載ぬ里

知足一家

知足を歩州海北人慈母と交り海一之居我叔照之
垣廉亭と号す一糸子風流あり或る姓の二男三男とれ
く小仕立しる後居小中若しる句「落葉之河梁報く」一
歌居ふ又一く風や吹袖吹く素裳一知足の子父此志我
縁く千を掛を著に「睡なく一夜く」夜なき一蝶羽「松
根小多代我何居る世系ふ知足母「里加よひいごうあや就
月隣母事「公系一」集つこれ居雲あり蝶羽其妻子

山口素裳

山口氏之江戸の人為小和漢此出を嗜く待文を吾に老母
侍く至孝あり人何るひと妻を迎ふる成すむむるを固辞

して居みぬ是秋のふも遠んる我忍れなり等実の君子
軟祢すく一弱冠あり季吟若つと遊く能送此達者と
りる居此名を今日といひ又素裳といふもその
別号あり後或る或成辞してあり海川の別居一送
池成堀里交友を集く晋北惠達を道社に撤せしあり能
あり「若ら社中と稱するは是此等又依てたまらむ社中
録すは句「池小精赤一仮名く紀習ふ柳く友を伴み赤言
糸種「年をもちや軍ちりれつは福河「旨す紀ぬゆや月若
十三夜「跡を削るははと家や新鼓舞人小捨灸せし
目には書禁山ほとぎは初が川河豪快あくと可見享保二
年八月七十五歳一して歿せり或人慈母又能借たりし
んと字ふ小唯死せりと答られし「こちよりは生は箱と此雙此

交際こうざいおぼろふ多古人の風阿里あくいと奈つり一独るに今時の
 人招まねり断金たぎん成なりと亦またて文小ぶんせうハ冠かん警けい此こ如ごとく吳越ごえつを陪たがひする
 援さ成せい投とうする名百なひゃくと亦また一嘆息たんそくするに餘あまり



佛家奇人談巻六中

